



Title	地域におけるデザイン教育について：滋賀県大津市と米原市を事例として
Author(s)	佐々木, 一泰
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75358
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

地域におけるデザイン教育について

—滋賀県大津市と米原市を事例として—

佐々木 一泰 滋賀県立大学

1. 本発表の目的

本発表では研究室学生が主体となった例を通じて、地域におけるデザイン教育についての考察を行うことを目的とする。大学に関わる地域活動には様々なものがある。滋賀県立大学は、地域に開かれた大学として、近江楽座を代表的なものとして、学生の地域活動は1995年の開学時から活発であり、地域への認知度も高かったといえる。我々が活動に携わる2006年頃は、空間デザインを活動の中心とした研究室であったことから、地域の空きスペースの改良依頼が多く寄せられた。当初は地域の方々の要望を聞き取ったうえ、プランを提案し改良を進める一般的な方法を採用することが多かったが、改良後に現れる課題として、ハードの整備が進むにつれ、顕在化してくるソフトの整備も同時に求められることがあった。ソフトの整備には継続した協力体制が必要であり、大学と地域の双方の協力体制の整備を考える必要が生じた。また活動によってつくられたものの検証にも課題がみられた。活動としての記録に加え、デザインと評価についての手法の確立を目指した。

2. 石山アートプロジェクト

まず事例のひとつとして、大津市石山商店街で行われた「石山アートプロジェクト」を例に挙げる。2009年度に当研究室に依頼が行われたプロジェクトは、ハードの整備を完成されたものとして捉えず、空きスペースをテンポラリーなものとして捉え、その場所でどのような活動が可能か、地域と研究室院生を中心とした実験的な活動を行い、

調査と検証を進めた。これは当時大学院生の林宏美さんを中心として活動が行われた。この活動では、地域の人々や大学が出来ることが何かを確認することを目的とされた。まず行われたのは、商店街に関わる人々の確認であった。これは当時商店街を利用していたが、具体的な商店街との関係を持っていなかった人々である。当時増えてきた地域との繋がりが希薄であったマンションの住民の方、地域で活動を行う福祉作業所、そして大学生など、商店街が関係を構築したい人々が見え始めた。しかしどうやって関係を構築するかが課題であったが、中心となった学生が目にしたのはアート活動であった。そして、商店街、地域の住民の方々、福祉作業所のそれぞれをアーティストがつなぎ、その活動を学生がマネジメントする構成を採用し活動をはじめた。

石山アートプロジェクトは2009年から2011年まで活動が行われた。運営資金は商店街からの補助と、大学からの学生活動に対する助成であった近江楽座、あと県からの地域活動に対する助成を活用した。一年目に見つけた発見としてアーティストの方々のコミュニケーション能力の高さであった。当時ワークショップを行うアーティストが増え始めており、地域の様々な立場の人との活動に慣れていたことが挙げられる。一年目は「積み木・陶芸・さおり織・音楽」、二年目は「陶芸・書・版画・写真」が行われた。三年目は代表が大学院生の川村浩一君に引き継がれ、アーティストを落語家に変え計四回の落語のワークショップを行い、寄席にはこれまでの活動でつくられた作品であった

り、書の活動とのコラボレーションも行われた。この活動では積極的に他団体との情報共有が行われた。また、活動を視覚化して整理と記録を行うため、商店街での展示や美術館やギャラリー、商業施設での積極的な展示が行われた。結果、新聞などでの客観的な報道や、書籍掲載、デザイン賞の受賞など、記録や評価手法などの一定の効果を上げた。最終的には3年間という期限付きの活動であったが、地域住民の交流やワークショップを通じて他大学も含めた地域での交流は、活動の終了後も地域の祭りを通じて継続されている。

3. 伊吹の天窓

事例のふたつ目として「伊吹の天窓」を例に挙げる。これは移住者と地元の方が中心となった2010年から行われた里おこしイベントである。2014年から研究室が舞台装飾や会場構成として関わることとなった。先ほどの商店街での事業と共通するのは、スキー場を会場としたテンポラリーなイベントであることが共通点として挙げられる。この活動は学部生の三回生によって行われた。学部生の活動の難しさとして活動期間の短さが挙げられる。大学院生では自身の研究と関連させることが出来れば約2年間活動することが出来るが、学部生の場合は他の授業や卒業研究、就職活動との両立が難しい。そのため、研究室や地域の方々や関係者、行政とでつくる実行委員会が枠組みをつくり、研究室がその一部を担当する構成とした。テンポラリーなイベントではデザインと設置や撤去の容易さの両立が求められる。当初は竹などの地域で手に入る自然素材の活用が行われたが、撤去の際に生じる廃棄物の問題が大きかった。そういったノウハウの蓄積の後、最終年度となった2019年度は、学部生の萩原咲楽さんを中心として舞台デザインを行った。

4. 比較・考察

二つのケースでは、ひとつは大学院生の研究目

的と一致させた活動に、学部生がそれぞれのスキルを活かして参加したものである。もう一方は地域での活動組織に学部生が加わったものである。大学院生の参加は全体のマネジメントと検証を同時に行うことが出来るメリットが大きい。デメリットとしては研究の新規性の確保があげられるが、コンテンツを大きく変更することも可能であることが一連の活動から可能である。一方地域での活動組織への参加の場合は、活動内容をコンパクトにすることが可能であり、活動範囲が明確になる特性があげられる。デメリットとしては、活動範囲が限定されることの自由度の確保や、収益性や実現性などとのバランスが難しいことがあげられる。

組織構造が複雑になることは、全体の意識の共有が重要な鍵となるため、コンセプトワークの重要性が高まる。特にシンプルで明確なコンセプトが求められる傾向がみられる。

また、ふたつのケースを比較したときに興味深いのは年齢構成である。学生の年齢層は固定されているが、それ以外の年齢層は変化し、ターゲットや活動中心世代も変化がみられ、継続的な活動のひとつの鍵では無いかと考えられる。

参考文献

- 林宏美, 佐々木一泰: コミュニティにおけるワークショップの実践と考察—大津市石山商店街を事例として, 日本建築学会学術講演梗概集 F-1, 都市計画・建築社会システム, pp.1041-1042, 2011.07
- 佐々木一泰研究室, 佐々木一泰: 石山アートプロジェクト, 『トウキョウ建築コレクション 2011』, トウキョウ建築コレクション実行委員会, 建築資料研究社, pp.318-321, 2011.07
- 林宏美, 佐々木一泰: アートマネジメントの人材育成—滋賀県立大学の「近江楽座」の取り組み, 神戸大学・学生派遣事業・インターンシップ調査事業報告書, 神戸大学異文化研究交流センター, pp.118-120, 2012.01
- 佐々木一泰, 久保愛美, 他5名: 石山アートプロジェクト巡回展 (展示計画・展示什器), 『年鑑日本の空間デザイン 2013』, 六耀社, p.162, 2012.12